

革命エデュケーション 第一部

# iPhoneの 先にある未来

【第五回】

引用・世論形成・差異の消失

【第三回】  
引用・世論形成・  
差異の消失

3 リツイートは誰のツイート？

10 「私たち」のコミュニティ

16 選択肢としての「革命」

## ■ リツイートは誰のツイート？

**細井** ちょっと、こちらへんで発話する主体の問題に話を戻そうと思うんですが、リツイート<sup>1</sup>レベルの発話（と一応呼んでおきます）だと、今の話じゃないけど発話したことすら忘れてるのにそれが拡散されてる、って状況がありますよね。あるいはリツイートした情報の正確さにも関係するところなんですけど、デマが拡散したとして、その責任の所在はどこに帰着するのか。普通に考えればもちろん元のツイートをした本人なんだけど、それが拡散する過程で関わっている人間に全く責任が無いのかと言うと疑問

.....  
1 Twitterの機能の一つ。特定のツイートを、引用として自分のフォロワーに紹介する機能。いくつかのやり方があるが、基本的には用意されたリツイート・ボタンをクリックするだけ。

を感じざるを得ませんよね。HP やブログ時代に比べて、そのあたりの意識が薄れていると感じます。

鵜川 そう。リツイート、怖いです。だから僕は一時期以降、よっぽどのがない限りリツイートしてなくて、もっぱらふぁぼ<sup>2</sup>ってます。正誤が問われる情報をリツイートすることはもちろん怖いし、リツイートという行為の容易さが気づきにくくさせている「復唱しているその声は自分」という事実も恐ろしい。引用主体の存在がこれほど薄らいだのは、未だかつてないんじゃないでしょうか。そういう意味で、ブログが実現したのは確かに「総表現社会」だったかもしれま

.....  
2 Twitter の機能の一つ。特定のツイートを「お気に入りに登録」すること。リツイートのように、それが直接他人の TL に流れたりはしない。「Favorite」の「Favo」が動詞化した言葉。

せんが、Twitterは「総引用社会」を実現させる。みんなが「引用」する時、そこで共有される情報は、今までとは全く違う価値概念で動いている気がします。

**細井** そのゆ一話で僕が思い出すのは、<sup>3</sup> 昨年の3.11のときにわりと早い段階で、「地震でラックが倒れてきて下敷きになっている。助けてくれ」みたいなツイートを打った人がいて、それが<sup>4</sup> 拡散するわけです。僕は読んだときに「ちょっと怪しいな」とは思ったんですが、まあそれに対してとりあえずリツイートする人が沢山いた。そしたら数日後、ツイの内容は嘘っぱちだったということが判明し

---

3 2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（及び、それに端を発する東日本大震災）。

4 あるツイートが、リツイートによって多くの閲覧者に広まっていくこと。それを要求するツイートには「拡散希望」と書かれていることが多い。

たんですが、これをリツイートした人をどこまで責められるかという問題ですよ。これをリツイートした人の多くは、当然これをネタとは思ってなかったからこそ拡散したわけですが、結果的にはタチの悪い冗談(それ以下の気もしますが)を撒き散らしてしまった。これも僕の好きなフレーズですが、「地獄への道は、善意で舗装されている」という言葉を思い出しました。

**鵜川** 3.11の時って、いろんな情報がリツイートで飛び交いましたよね。で、その時のTwitterユーザーは、それでだいぶ鍛えられた気がする。「拡散希望」に安易に乗っかっちゃいけない、とか。新しいユーザーがそういう情報を拡散させたとしても、あの時みたいに「とりあえずリツイートしとけ」的な広がり方は

しない。で、その結果、今 Twitter で拡散されてるのって、情報よりも意見なのかな、という印象を持っています。140 字で表現される意見、というのがミソで、それは根拠がしっかりしていて論理的な正しさを持つ意見ではなく、自分の感情を汲んでくれていて、それをうまいこと言っている意見です。ワイドショーに出演するコメンテーターや芸能人みたいな立ち位置ですね。

そうして、単一の言葉が、文字通り異口同音にリツイートされていくことで、実際に多くの人目に触れ、その言葉に物理的な強度が与えられる。今後、世論の形成に Twitter がますます大きく寄与していくことは確かだと思いますが、それが望ましい世論の形成につながるかは、はなはだ疑問です。

**細井** そうそう、3.11の緊急連絡みたいなものと、その後の放射能関連のツイートで、リテラシー能力が高まった。今の鶴川さんの話には基本的に同意です。もともと、Twitterユーザー自体が持っている性質にも関係があると思いますが、「うまいこと言った」つぶやきやユーザーが評価される傾向がありますね。一種の大喜利というか。で、どこか斜め上から目線というか、当事者意識が薄め。ある意味で言うと、話が戻りますが「自分と似た視点」を緩く共有するムードがTwitterの通奏低音って感じですかね。

**鶴川** それは、第三回で話した「イイネ！」の逆ヴァージョンですね。「イイネ！」が外部からの承認によって自己を無限肯定する作業だったのに対して、これは外部を選択的に承認することで選択



する主体としての自己を無限肯定していく作業です。「『自分と似た視点』を持っている人がここにもいる！ だから自分は正しい！」とか、「自分と同じことを考えている人が、こんなに『うまいこと』言ってくれている！」とか。

それはそれとして、「大喜利」的な感覚は強いですね。出来事＝フリ、つぶやき＝ツッコミ（まれにボケ）、みたいな。で、出来事そのものについては、わかりやすさだけを身上にした解説者に任せる。そこでは、自分の思考を経由した結果得られる確からしさよりも、自分の感覚にフィットするか否かで価値が決定される。信じたい情報や意見の前では、ソースの不明確さや、なんならデマであることすら無視されるんですよ。

**細井** もはや確認になっちゃいますが、

その意味では、住人の質は違うけどFBもTwitterも、ある種のクラスタを形成して自閉的になっていく、というのはある程度共通してますよね。最近FBも「自分が信じたい情報」を共有するため、あるいは情報操作のためのツールとして機能している面があると聞きますし。

## ■ 「私たち」のコミュニティ

**細井** さっき出た世論形成におけるネットの力についての話ですが、この対談の最初は、ネットコミュニティに可能性はあるか？ というような話でしたね。その意味では、東浩紀<sup>5</sup>さんの『一般意思2.0』とかは参照項になりますよね。

---

5 『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）など批評家としての活動の他に、2009年に発表した『クォンタム・ファミリーズ』（新潮社）では三島由紀夫賞を受賞した。

鵜川　そうですね。『一般意思 2.0』で触れられている様々な要素は、ネットをベースにした今後の社会の在り様を考えていく上で参考になるので、ぜひ手に取ってほしいところですが、その主張の骨子を（乱暴ではありますが）まとめると、次のような感じになります。

これまでの民主主義は、専門的な知識や理性的な判断を前提にした「熟議」を基盤においていた。しかし、大衆と政治の乖離は進行する一方であり、「熟議」を前提にした政治参加は限界を露呈している。他方、Twitter や SNS などによってネットは「総記録社会」<sup>6</sup>を実現してお

---

6 東氏は、梅田望夫が Web2.0 の特徴を「総表現社会」と述べたことを受けて、実際には、誰もが能動的な「表現」に向かうわけではないと指摘する。一方で、一人ひとりの消費行動は、データとして収集され記録されているとし、この状況を「総記録社会」と表現した。

り、その文面を形態素解析などによって分析することによって、社会的な無意識を可視化することができる（これを「一般意思 2.0」と呼んでいます）。今後は、現状の議会制民主主義を維持しつつも、可視化された「一般意思 2.0」を「制約力」として機能させながら政治を行っていくべきである。

といったところでしょうか。

**細井** そうですね。東氏の議論は、要するに「私たち」の意思を反映しつつも、「私たち」とは異なる第三者的な審級<sup>7</sup>を導入すべきだ、という意見ですよね。いわゆる現在の「自覚ある市民たちが民主

---

7 「第三者の審級」は、社会学者 大澤真幸の用語。社会や組織といったコミュニティにおいて、価値や規範を規定するような、超越的な他者的存在であり、自分と相手との議論や論争について、何らかの形で裁定してくれる社会的な物差し。とはいえ、必ずしも明確な存在としての他者ではない。

主義的な社会を構築、維持するべきだ」という在り方に対する批判的な検討ですよね。

結局、今までの議論とも繋げてやはり問題になるのは、テクノロジーをベースとした外部的なシステムを導入すべきか否か？ という話になるかと思うんですが。ちょうど、今年の慶応法学部の「論述力」のテーマがそれでした。

鶴川　　そういえばそうでしたね。慶応法学部は毎年、課題文型の小論文が課されますが、今年の入試では「国家の未来」についての論考から、二つの「未来国家像」が提示され、それを比較検討することが要求されました。ちょっと、その二つの国家像をまとめてみます。

「未来国家Ⅰ」は、人々の内面を監視し、特定の意思や感情的反応を排除する。そ

ここでは、立法者となるべき人間が生まれ  
ないため、脱人間的な「プログラムの自  
己運動」によって人間は管理される。そ  
こに生きる人々は「外的強制なく、心の  
欲するところに従っても則を越えず、平  
和的に共存している」。

これに対して「未来国家Ⅱ」は、「人  
間性に深く根差した欲望」は消去できな  
いとし、「遺伝子工学」によって、人間  
の性質を生まれる前段階でコントロール  
する。ただし、「各国が主権国家として  
独立したまま」では、「闘争的な人間」  
が生み出されてしまうため、「人類の政  
治的再統合」の実現が必須条件である。

**細井** ふむふむ。ちなみに両者の共通点  
を挙げよ、ってのが設問の一つですね。

**鶴川** そうでしたね。その点について言  
えば、どちらも国家が主体となって（そ

ここに人間が関与するかどうかは別として) 国民を管理する「未来国家像」です。事実、我々の社会は——技術的な進歩も相まって——監視体制が強化され続けている。それはこれまでも既に語ってきたところです。一方で東氏は、こういった監視技術によって可視化された「一般意思 2.0」を政治において制約として導入すべきだ、と言う。

この両者を見比べた時に、大衆はどこまで自分の行為を主体的に選択できているのかということが気になってしまいます。もちろん、東氏が大衆の主体性など問題にしておらず、ログを解析することによって集合的な無意識が見えるので、それを参照項として導入すべきだと言っていることは分かっているのですが、そのログそのものが、すでに誰かによって

たどられたログの後追いでしかないとすれば、その解析はどこまで信頼できるんだろう、と。

**細井** 主体性の話ですね。とりあえず設定として、慶應法学部の「未来国家」像は人々が選び取ったものであるのに対し、東氏の「一般意思」はそうでないということなんだと思いますが、どちらにしても我々人間が作り出したシステムである、というおおもとのところは一緒です。

## ■ 選択肢としての「革命」

**細井** 以前、FBとかmixiの「イイネ！」について話したこととも繋がるんですが、「テクノロジーを生み出す側がどこまで自覚的なのか？」は僕にとっては気になる問題です。もちろん、かなり意識



的な部分も当然あるとは思いますが、その一方で、あまり自覚的でない作り手の生み出したものが人々のあり方を変質させていくことの怖さを感じますね。

話を戻すと、やっぱり第三者的な審級に何かを預けるべきなのか否か、という点ですが、僕はやっぱりそこは越えない方がいいんじゃないかな？ と思います。「古い」と思われるとは思いますが、一回そこを手放しちゃうと危険だと思うんですよね。前も話したけど、もうすでに僕たちの社会はデータベース化されていて、個人の行動や思考などが記録されていて、必要に応じてそれを取り出すことができる——つまり、監視されている。だからこそ「どうせ見られてるんなら、別に監視されるのも同じじゃん」って思う人もいるだろうけど、僕はやっぱり建

前論かもしれないけど個人の自由というものを守る必要があるんじゃないかと思います。

鵜川 でも、監視システムから手を離せない以上、自由を実現するのは難しいですよ。前にも話が出ましたが、今の状況って、選択肢が相当限定されてるのに「自由に選んでいいよ。でも自己責任ね」みたいな感じじゃないですか。そこから、選択肢にない発想を生み出せるのかというと、厳しい気がします。

というのも、ここんところ、毎週金曜に首相官邸周辺で原発反対を訴えるデモが行われてるじゃないですか。「紫陽花革命」<sup>8</sup>なんて呼ばれてるみたいですが、二

---

<sup>8</sup> 2011年3月から毎週金曜に開かれている反原発デモ活動の総称。Twitterでの呼びかけから始まった活動だが、参加者数は回を追って増えており、6月22日には4万5千人、翌週29日には20万人（主催者発表）に上った。

ユースで参加者のインタビューを見ると、“いわゆる反対意見”のコピペでしかない。もちろん、インタビューの仕方次第で回答は誘導されるし、番組構成に応じて恣意的な選別が行われるし、そもそもインタビューという状況が（Twitterのように）主張や議論ではなく、短い意見しか許容しないわけですが、それにしても、その意見をその人がどこまで本気で吟味したのか疑問です。「安全性に疑問」と言っている人が、その「疑問」が解消される状況をどこまで想像しているのか。具体的に、どのように「安全性」を立証することが可能だと考えているのか。原発問題そのものについてこの場で言及するつもりはないんですが、そんなことを考えずにはられません。

そういった意見は、メディアを通じて

可視化されている。そして、少数意見であっても可視化できるのが Web 2.0 の世界であり、SNS はそれらの少数意見を結びつけて言説空間を作り上げる。かつてないほど多様な言説が同時並存する中で、自分の身振りがどういう位置にあるのか、マッピング可能になる。自分の中の、うまく言語化できない違和感みたいなものも、その地図を見れば「ああ、俺のこの不快感は、こういうことだったのか！」と納得できる着地点が得られてしまう。「紫陽花革命」に集まっている人たちは、そのきっかけにおいては、形にならない情念みたいなものに突き動かされていたと思うんです。ところが、いろんな言葉を見るうちに、形にならないものに形を与えてしまった。それも、とても分かりやすく単純な形に。それが、

怖いです。

**細井** うんうん、「紫陽花革命」については、かなりいろんな要素が内包されてると思うんで、それだけで一章割けるくらいの感じだと思うんですが、今鶴川さんが話してたことはけっこう重要だと思います。

というのは、さっきも話が出たように、今の僕たちに与えられた選択肢は、一見すると多様なように見えて実際は極端に限られている。そのときにある選択肢を選ぶことは、個人の中での色々な逡巡や葛藤とか、様々なものを検討した上での「決断」なんですよ。たとえば色で言うと赤と青のどちらかを選択しなければいけないときに、自分自身の気持ちとしてはちょっと黒が入っていたりとか、若干緑も入った青だとしましょう。それが

最終的には青という結論、判断になる。それは仕方のないことなんだけど、他人がそれをひとまとめに青と見てしまう、さらには選んだ自分自身が最初から青と思い込んでしまうようなあり方を「紫陽花革命」での言説に感じたんですね。実際、このデモに参加してる人たちは「決断」を経ているわけですが、その言葉はいわゆる大文字の<sup>9</sup>それになってしまっていて、当初に彼らが持っていたはずのニュアンスは消去されてしまっている。

その転換とか変換がいつ、どのようにして行われるかはわからない。というか、個人を取り巻く状況や心理によっても異

---

9 抽象化され概念化された対象を、一般に「大文字の○○」と表現する。この場合、「決断」にまつわる言葉が、自分の内から湧き出てきた固有のもの（それは安易な言語化を許容しない）ではなく、抽象的な語句や観念的・理念的な言葉によって成型されてしまっているということ。

なると思いますし。でも、実際にメディアのみならずツイッターやFBで流れている人々の言葉は、間違いなく大文字のそれになってしまっているのは事実だと思います。そしてそれが、「デモに参加するか否か」みたいな形で僕たちを切り分けていくのだとしたら、とても怖いことだなと思いますね。

その意味で、Web2.0以降、僕たちは言葉を発する手段は手に入れたけど、まだまだ適切な話し方を身に付けていないんじゃないかと思うんですね。それを模索している状況が今なんだと思います。

さっきのコピペ話とも繋がるけど、何かをただ横流しするんじゃなくて、そこで語られている言葉を検証した上で拡散すること。あるいは、流通している言葉を少しでも自分の感じているニュアンス

に翻訳してから語ること。僕はそういうスキルを、SNS 社会における「倫理」と呼びたいです。

(以下次号)

---

《革命エデュケーション》

# iPhone の先にある未来

【第五回】引用・世論形成・差異の消失

平成 24 年 7 月 18 日 発行

著 者 細井 正之・鶴川 龍史

編集者 鶴川 龍史・細井 正之

発行所 世田谷学園 国語科